

32-317



太

郎



場面

鬼ヶ嶋大王殿

人物

桃太郎

鬼ヶ嶋大王

猿彦

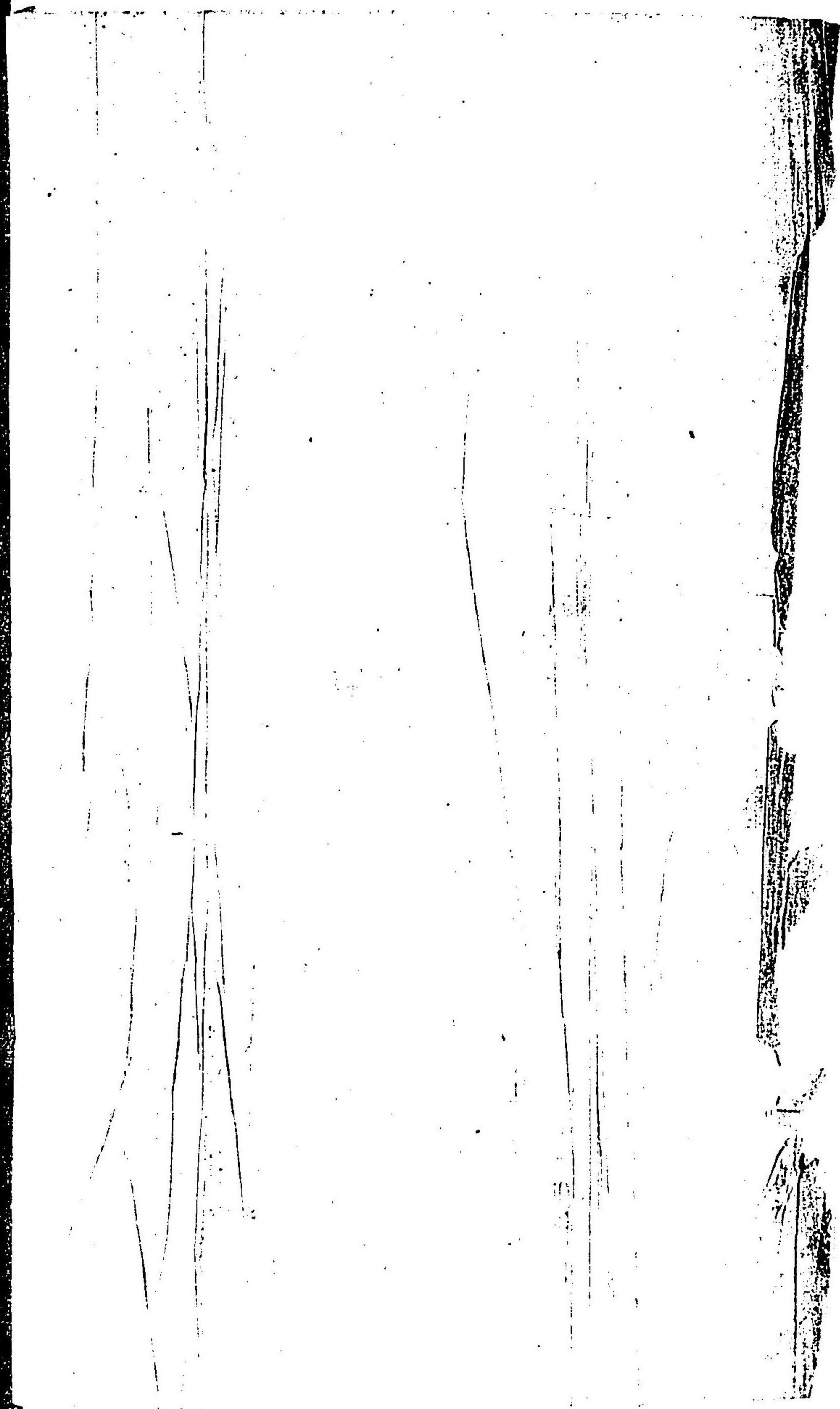
女鬼白姫

犬丸

女鬼四名

雄子若

其他鬼の眷族





新歌舞伎「桃太郎」のはじめに

凝つた体裁は文祿堂の大道樂で虚が無きも、古劇の模擬は作者の道樂で好かないなどと言はれはせずや。大間な簡單な趣向のうち、現代趣味を些か交ぜたは、道樂過ぎた外道樂と、大上段に振りかぶつて、一本参らぬその先に、扇の蟹目をそつちへ向け、かう正眼につけて置く。

丁未二月鬼やらひの日

はくせい

新 歌
舞 伎
桃 太 郎

鬼ヶ嶋大王殿



平 木 白 星
水 嶋 爾 合 作

舞臺は總て鬼ヶ嶋大王殿の體、中央中足の屋臺、
錦襦の緞帳を垂る。

正面しょうめんから稍やや上手かみてに犬丸いぬまる、黒くろと白しろ接はぎ合あせ厚あ綿わたの廣袖ひろそで、白鉢卷しろはちまきの先頭さきかぶを刎はねて犬いぬの耳みみのやうにつくり、大槌おおいを持もつ。下手しもこ寄よりに雉子若けしわか、納豆なつと烏帽子えぼし腹卷はらまき、弓箭ゆみやを手てにする。
大小おほいせう鼓つづみ入いりの合方あひなた。

犬丸いぬまる「何なんと雉子若けしわか、總もじて物ものの合戦あつせんには、對たい手ての弱よわいがいつち禁物きんぶつ、昔むかし嘶ほによく聞きい

て、手て硬こい者ものだと思おもひの外ほか、根ねッから氣けも無ない鬼おにめてござる。

雉子若けしわか「犬丸いぬまるがお言いやる通とほり、聞きいたと見みたとはおほきな相違さうち、鬼おにのしこ草くさ鬼草おにくさ、名なばおほきな相違さうち、鬼おにのしこ草くさ鬼草おにくさ、名なばかり強つよいまがひもの。

3. 犬丸いぬまる「寶たから道具たぐを積つみ出だして、へたくた降参かうさんけ

つかるたア、鬼鯛よりも甘いやつ、高い
お屋根の鬼瓦、見たとこばかりで、埒
無い。

『その素首を引ん抜いたとて、金米糖の
看板にも、角の足りねエうつけ面。

犬丸『神妙殊勝な降服に免じ、兎も角生命は

助けると、日本一の我が君が、寛仁大度
の御はからひ。

『仰せが無くばこの雉子若、鬼殻焼にし
て食ふか、鬼うち豆や鬼飛礫、投げ殺し
ても呉れべいもの。』

『兩人』命冥加な奴等で御座る、ははゝゝゝ。

① 犬丸「何は然れ、鬼ヶ嶋の寶をば、献上する
との今の使者、その旨上へ御披露申さう。

雉子若「そんなら犬丸、

犬丸「雉子若。

兩人「いざや御前へまゐらうか。

犬丸雉子若立ち上る時、緞帳のうちにて、

猿彦「あいや御兩所、桃將軍の御出座でござ
る。

犬丸「何、我が君の、

雉子若「御出座とな。

是より淨瑠璃になる。

7

淨瑠璃「萬づ代ませや、春のことぶき八千

代に千代に、そのももとせの桃いら
つこ。

唐樂やうの合方にて緞帳を開くと、真中に桃太郎、畫様の若衆鬘に力紙、一本隈、童子格子厚綿の着附、鉦うち赤の筒袖、緋の陣羽織、角罎の大小にて床几に凭り、桃を書きたる扇を胸のあたりに開く。

その右に猿彦、猿隈、色地に金糸もて申の字繫ぎを縫ひたる着つけ、「日本一」と書さし小幟を携ふ。

桃太郎 『東東南蠻北狄西戎、天威あきらかなら
ざる無きに、貪瞋痴慢の積鬼滅鬼、弱き
心につけ入つて、屢々人界を騒がす奇怪
さよ。』

淨瑠璃「扱もこのたび、海山越えて、黍の糧をば腰になし、犬猿雉子随へて、鬼が嶋へとうちわたり。

桃太郎「大和劍に縦横無礙。

淨瑠璃「四面四ゆいに薙ぎ立て、突き立て、散々鬼畜を打ち惱まし。

桃太郎「島の王めが歸順せば、天下は太平、國土安穩。

淨瑠璃「ほて快きかちいくさ。

桃太郎物語りやうの振ある。

11 猿彦「いや何御兩所、大王降服のしるしとあつて、寶獻上とは殊勝至極、疾くその貢

ぎをさし出さしめ、君の御覽に供へられよ。

犬丸『お合點だ。』

犬丸花道の附け際にて、

犬丸『やあやあ大王の使ひはどこに、かの品これへもち出せよやい。』

「はつ」と答へて女鬼四個、綺麗なる装束にて、寶物を捧げ出でて、桃太郎の前に供へる。

淨瑠璃「鬼ヶ島なる寶の數々、御前へ供へ奉る。」

の女一鬼「大王を初めとして、この島に住するものが、尊き君へ双向ひし、天地容れざる

罪の程は、

四女鬼 『御ゆるしなされて下さりませ。』

桃太郎 『むむ目ざましやな、蓬萊山をかたどつ

て、長生不老の日月を、盛るにも似たる

寶の山。いやとよ、そこなる鬼の女、ま

かりつん出て一つ一つ、寶のいはれを説

き明かせよ。

淨瑠璃 「寶のいはれをのべよの御説。

四女鬼 『畏まつてござりまする。』

女鬼前へ出て、

の女一鬼 『そもそも寶の第一には、日輪のかげを

ここに横し、磨き上げたるこの火焔珠。

淨瑠璃 天に捧げてえいえい、やつし
やつしと振る時は、闇も晝なる夜光
の珠。

の女 二鬼『さてまた第二の寶には、月の雫の滴り
て、凝り結びたる水精珠。

淨瑠璃 地にむかつておゝおゝおゝ、はつ

しはつしとうち振れば、數丈の潮湧
き起る。

猿彦 『して第三の寶には。

の女 三鬼 『これや深秘のかくれ簍。

犬丸 『第四は。

17
の女 四鬼 『戀のかくれ笠。

雄子若『さても第五の寶とは。

四女鬼『打出の小槌と稱へし名器。

淨瑠璃「東南西北に禮拜して、天三寶地三

寶、えいやがつしと打振れば、望み

次第に米藏、黄金、出でぬもの無き

稀代の重寶。

四女鬼相つれて振りある。

桃太郎『はて珍らしや、おもしろや、いづれ希有なる珍器名寶、爺と婆とに土産が出来た、何と物共さうでは無いか。

猿彦『仰せの如く天下一品、いや何二品も三品も、揃ひ揃つたかぞいろへ、これぞ上

無なき好よきお土み産な。

犬丸『人の恐おそるる鬼おにヶ島、容易たやすく御手おんてに入り
たるも、

雉子若『みな我が君きみの孝かうの徳とく。

三人『一同いっしょ、欣よろこばしう存ぞんじまする。

桃太郎『おお大勝たいしょうのそのことぶき、桃太郎ももたろう満足まんぞく

ぢやわい、やい猿彦さるひこ、吉例きちれいによつて何か
一つ、めでたいかぎりを舞まひ收きめい。

犬丸『猿彦さるひこどのが御自慢おんじまんの御手振おんてぶり、我が君きみの
御所望おんじやうぼうでござる。

雉子若『さあさあ御祝儀おんじゆぎの亂舞らんぶ一ひとさし、この場ば
で拜見致はいけんいたしたいな。

猿彦「これは近頃恥入るおすすめ、さりとして君の仰せもあり、尻込みは不吉、然らば我が君、いづれもがたにも御免なされ。

猿彦前へすすみ、

猿彦「お猿はめでたや、慶でたやな。

淨瑠璃「まかり出でたるやつがれは、海に

も千年、山にも千年、淨世にやそれ
それ、三千三百三十三年、さつても
三世の永き世に、かかるめでたき勝
ちいくさ。

猿彦「さりとはさりとはあるかいな。

淨瑠璃「さんな又あるかいな、ああらめで

たや、一天四海は治りて、七珍九寶
は山より高く、君の恵は海より深く、
人を騒がすものとは。

猿彦「またあるかいな。」

淨瑠璃「さんなまたあるかいな。」

これより犬丸雉子若出でて猿彦にからみ、

淨瑠璃「いよいよ明日は故郷へ、歸る錦の
帆かけ船、楫は黒檀、櫓は紫檀、櫂
は白銀、艫は珊瑚。

三人「寶のかずは何々ぞ。」

淨瑠璃「打出の小槌、浮屠の着れは隠るる
簀と笠、瑠璃のくし、瑠璃のかざしに、

瑪瑙水晶碑磔赤珠。

がかり「碇まき上げ蟬口しめて、ヤンレ表上

りて汐風みれば、後れ先だつめうと

浪、ヨイサ女夫浪。

三人「さつさ押せ押せ。」

淨瑠璃「大灘小灘も何のその、千里一夜の

音頭で通る、海穩かに風も無く、ま
ことにめてたうさふらひける。

三人舞ひ收める。

桃太郎「天晴れいみじく舞ふたりな、存分興も

盡したれば、一睡りするその間、汝等次

間にて休息せい、それなる實はあちらへ

置いて、鬼の女も罷り立てい。

猿彦「然らば御兩所、次の間にて、

大丸「銘々いくさのはたらきを、

雄子若「寝物語と致さうかい。

の女一鬼「左様なればこれなる品は、

四女鬼「かしこの一間へ、

一同「我が君御免下さりませう。

皆々静かに上手へ這入る。

淨瑠璃「日本一の荒若衆、草刈る爺と衣そ

そぐ、婆が秘藏の桃わらべ。

詭の合方勇ましく、桃太郎ツツ立ちて。

桃太郎「草を枕にひき結ぶ、旅寝はつれエもの

だと聞くが、世界をおのれの家として、
 天地の舞臺で飛六法、ふん反り返つて寢
 る時は、鼾いびきでふるふ四維しじ八荒はつこう、いかづち
 あらしは子守唄、大八洲の大やんちやが、
 どりや大の字と、突張るべいか、やつと
 ことつちやあうんとこなあ。

大きく寝る、同時に緞帳をしめる、跡風の音。

淨瑠璃 「寂寞たる天地の、やうやう更けゆ
 く夜のいろ、鐘なき國のしづけさよ。

女鬼白姫、白玉冠と薄紅の蒙衣を持ちて窺ひ出
 づる。

淨瑠璃 「鬼も十あまり八つ口の、袂たもとに隠す
 戀こひごころ、忍しのべど袖そでの香はもれて、

闇にもしるき百合の花。

綴帳のうちをのぞき。

白姫「てもまあ長閑な人わいな、見れば見る程いさぎよく、むくつけな誰彼に、似ても似つかぬその御姿。

淨瑠璃「夢の胡蝶も舞ひ出でよ、舞へよか

くれし花に来て、縛れてつれてえいさつさ、夢の浮橋あら危な。

白姫「甯若衆殿、お前は何にも知るまいが、戦ひ半ば容易げに、矛を伏せて降参したは、そりや大王の計りごと、夜に入らば逆寄せして、晝の勝敗を揉みつぶさう手

段、武勇は畢竟の勝とはならず、自分の力量をただ頼み、危い所に熟睡する、お前をどうか助けようと、大體案じたことでは無い、これ見やしやんせ、この二つの寶物を、こなたの爲めに竊と持て來た。

淨瑠璃「瑠瑠瑠たる白玉の冠、春霞にまがふ

紅の襲衣。

白姫「この二つを身につけなば、世に恐るる事は無いと、むかしからの言ひ傳へ、喃若衆どの、油断は大敵、わしが手づから着せう程に、

淨瑠璃「御目さまされませ、こなたな人。

白姫「ええ我が心が通ぜぬかいなあ。

淨瑠璃「露の玉の緒たまさかの、身は浅ま

しや澤水に、影亂れたる鬼百合の、

鬼といふ名がうとましや。

白姫「心ゆたかの高軒、どりやそこへ行って、

さうぢや。

淨瑠璃「夢路や訪はむ蝶胡蝶。

白姫思入あつて上手へ這入る、あと大薩摩にな

る。

大ざつま「大北に國あり、鬼ヶ嶋と名づく、

億萬劫のむかしより、邪惡偽醜の政

廳、世呪り人咀り夢のろふ、魔笛高

高鳴り響けば、雷火亂れて天地もかへし、雲を捲き込むはやち風。八方八隅を騒がすや、日月の眼、枯木の角、焔を降らし火を吐きて、異類異形ぞあらはれたる。

雷の音、電の光烈しくなり、向ふより鬼の大王

被髮畫面のこしらへ、金環を貫きたる金鐵棒を持ちて先きに立ち、黄赤青紫の鬼十頭あまり、各々嚴つきこしらへにて出て、花道に止り。

鬼の王「天地をくまどる闇とこ闇、王莽が時は來りしよ。我が眷族の習ひとして、日輪天に在るあひだは、五體の力思ふに任せず、黄昏過ぎより曉へかけ、神變自在を

身に備ふ。

鬼の一「最前の一戦には、我にもあらぬ不覺を
取りしが、夜となつたらこつちのもの。

鬼の二「心にも無き降服を、眞實と思ひ氣をゆ
るし、前後も知らず寝そべるとは、不敵
のやうで迂濶なやつ。

鬼王「いで頭から鬼一口、我が通力を知らし
て呉れうぞ、物共それ。

鬼族「ははつ。

鬼の王初め鬼ども舞臺へ来て、二鬼眞先に緞帳
のかげに躍り入る。

鬼王「童め覺悟。

一せいに立ちかかると、緞帳ばらりと落ち、桃太郎以前のこしらへ(陣羽織)の上へ、白玉の冠と蒙衣を着たる體、一頭の鬼をふんまへ、一頭の手を捻ち上げて立身。

皆々玉冠蒙衣の威に恐れたぢろく。

桃太郎「喧しい大鬼小鬼、夢面白い寝いり端、

あつたら散した憎いやつ、近よつて角振

がれな、とつとと消えて無くなれえエ。

兩鬼を左右へ投げ退けてきつと見得。

鬼族「何を。

皆々再びかからうとしてたぢたぢとなる。

鬼王「ええその冠服はいづれに得しや、理正の冠、雅美の衣、善と美との二つには、

敵し難き我がちから、戦はずして敗るる
とは、残念や、ちえ、無念な。

鬼の王金鐵棒を投げ出してどつかと倒れる、同時に上手より猿彦犬丸雉子若得物を搔込み走り出る。

猿彦 『はて凄じき物音に、』

犬丸 『素破事ありと夢を蹴て、』

雉子若 『駈けつけ見れば、この有様。』

猿彦 『君の御寢所騒がして、』

犬丸 『推參至極な瘠せ鬼めら、』

雉子若 『搦み殺して呉れやうかい。』

桃太郎 『何の何の、鬼ごとあそびの數珠つなぎ、』

45
片つばしから引ッくくり、爺と婆への土

産のいつ、その面見よや、いかい痴けな、
ははゝゝゝゝゝ。

桃太郎はまた襲つて来る赤鬼の首を引抜き舞臺兵中に大見得、皆々引張りの見えよろしく、

幕。

新伎歌 桃太郎完

(桃 太 郎)	
著 作 者	平 木 照 雄
發 行 者	堀 野 與 七
發 兌 元	東 京 市 日 本 橋 區 榎 正 町 一 番 地 文 祿 堂 書 店
印 刷 者	東 京 市 京 橋 區 西 州 南 町 二 六 七 番 地 石 川 金 太 郎
印 刷 所	東 京 市 京 橋 區 西 州 南 町 二 六 七 番 地 株 式 會 社 秀 英 舍
明 治 四 十 年 三 月 廿 九 日 印 刷 明 治 四 十 年 四 月 一 日 發 行	
定 價 金 廿 五 錢	
不 許 複 製	

美之卷發行

木村鷹太郎先生著

真

善

美

美本定價一圓
一冊 送料十錢

東京日本橋區博正町一
文祿堂書店
振替貯金六六八二

健筆を以て聞えたる木村鷹太郎氏の文學。藝術。哲學。政治。教育。宗教。歴史。兵事。等に關する論文美文を集めたるものにして其文章や春風の駘蕩たるあり秋骨の稜々たるあり以て該博なる智識を學び明晰なる思想力を鍊り優美なる精操を養ふ、近來稀有の好著也

眞の卷の善の卷の續出

平木白星君著書目録

劇詩

釋迦

水島爾君畫
挿畫二葉
破天荒の美本

全一冊 正價金六十五錢 郵稅六錢

釋迦降魔の古説話は佛教の眞髓也。劇詩釋迦筆を大魔殿の群議に起し。釋尊が遂に正覺を成じ魔王を服するの一段金剛座に結ぶ、六夜又あり氣熱し拳飛ぶ。魔美人あり嬌語滴るが如く艶態花の如し。而もそれを描くに著者獨創の新文體を以てす。正にこれ天上天下唯一の快文字。

發行所 東京上橋町 如堂 振替貯金 六六八二 五三

平木白星君著書目錄

十 耶蘇の戀

插畫新式原色版
基督復活の圖

全一冊 正價金三十五錢 郵稅四錢

耶蘇の戀一篇。言ふところ先人未説の深秘密也。基督は一生戀を語らざりき。大畢果して戀愛を解せざりしか。本書はこの曠古の大疑問に應へむとす。

鳥居清忠。阪井紅兒。大倉耕濤。三書伯筆

長詩



木版插畫數葉
美本全一冊

價 金卅五錢 郵稅 四錢

龍燈耶。袖の火耶。あさよ何、新七誰、人情の至微

發行所 東京橋上町 如山堂 振替 四六三 貯金 五

平木白星君著書目錄

事の精髓は收めてこの書に在り。才子よ、佳人よ、疾く來りて。稜々たる俠婦と、愚直なる漁夫に接せよ。而して共に戀の眞味を語らすや。

阪井紅兒君畫

第四版出來



插畫四葉美本

全一冊 正價金三十五錢 郵稅四錢

報知曰く星彩あり涼味あり親燈の好友。萬朝曰く白星派精髓の結晶。國民は曰く簡潔にして強味ある所吾人は最も白星風の新詩を好む。

水鳥爾君畫

新體詩選

やま彦

印刷中

發行所 東京橋上町 如山堂 振替 四六三 貯金 五

水島爾畫伯筆繪葉書目錄

春夏秋冬 四枚一組
金卅五錢

片袖 全一枚
金十五錢

この四種の繪葉書は世上にありふれたるものとは全然其撰を異にし絢爛奇抜の極致を盡したる天下の珍品也

發行所

東京市日本橋區上槇町

如山堂書店
振替貯金六四三五番

壺坂 全一枚
金十錢

野崎 全一枚
金十錢

曲亭馬琴翁原著
京の養兵衛口演

日本五大噺

美本 全一冊

定價 十八錢 郵税 二錢

昔しから我が日本に、幾多のお伽噺がある中に、尤も人口に膾炙した有名なのが五題ある。それは、いづれも様御存じの

桃太郎

花咲爺

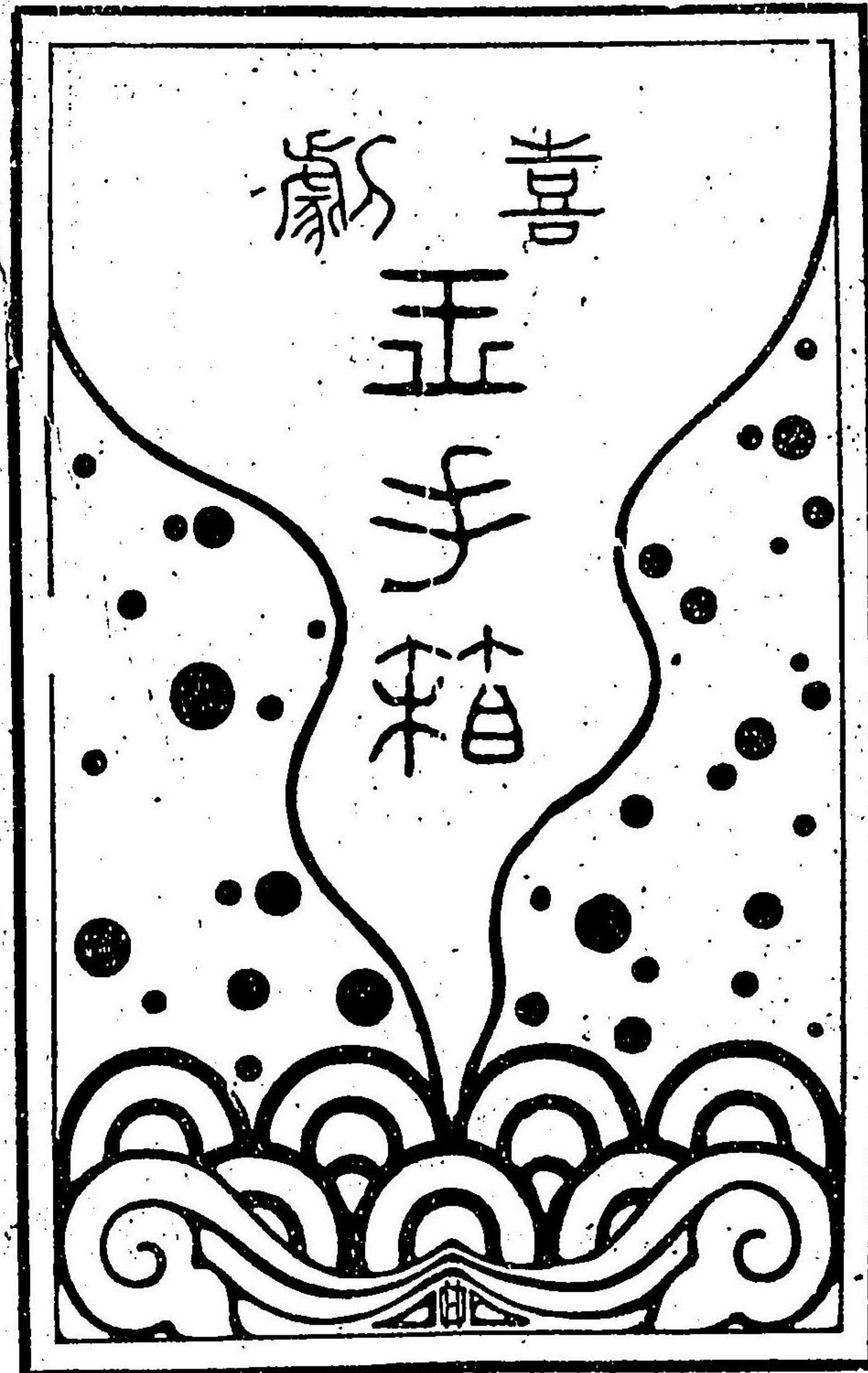
舌切雀

猿蟹合戦

かちく山

でありまする、これを文政年間の大文豪曲亭馬琴翁が、五種を巧に綜合して一篇の小説に綴られたを、京の養兵衛氏が明治風のお伽噺に口演され、目のさめるやうな美しくしい繪を澤山入れた、それはく面白いため、先年市村座で青年俳優がこれを演じ、大入大評判を取りました、古今無類の珍本であります。

高 評 再 版



美 本 全 一 冊 定 價 參 拾 錢

泰西列國の劇壇にフワイス(戯劇)ありコ
メデイ(喜劇)ありフワールシカル、コメデ
イ(戯劇的喜劇)ありコメデイ、イン、デス
ガイヌ(偽装喜劇)ありハイ、コメデイ(高
等喜劇)あり。

是等各種の喜劇は、能く悲劇と相駢馳し
て劇壇を賑はせるに係らず、我邦劇壇を
顧みれば、舊劇中に『蘆生の夢』の如き『花
暦八笑人』の如き『膝栗毛』の如きフワー
イスの一種あるのみ、新劇中に『戀の病』の
如き『夏小袖』の如きモリエルの不親切な
る翻案あるのみ。

に、脚本演技共に門戸に入り易きが如く
にして、其の堂奥に達し難きが爲め也。
是れを泰西列國の喜劇に見るも、上はア
リストフワチヌ。プロクタヌよりモリエ
ル。セキスヒヤア。レツシング。ジョン
ソン。ゴールド。スミス。シエリダン。
下はショウ。トルストイ。ピチロ等の脚
本中真正のハイ、コメデイとして賞讃に
値す可きもの能く幾何ありや、而も我邦
の新舊劇中僅に舊式不全のフワイス五六
種に過ぎざるに較ぶれば、實に雲泥の差
も嘗ならざる也。

此時に當り太郎冠者益田太郎氏は、頻り
に創作の喜劇鴛鴦亭、ハイカラア、正氣
の狂人、玉手箱等を出して、文壇並に劇
壇に貢献す、氏に取つては些末の餘技な

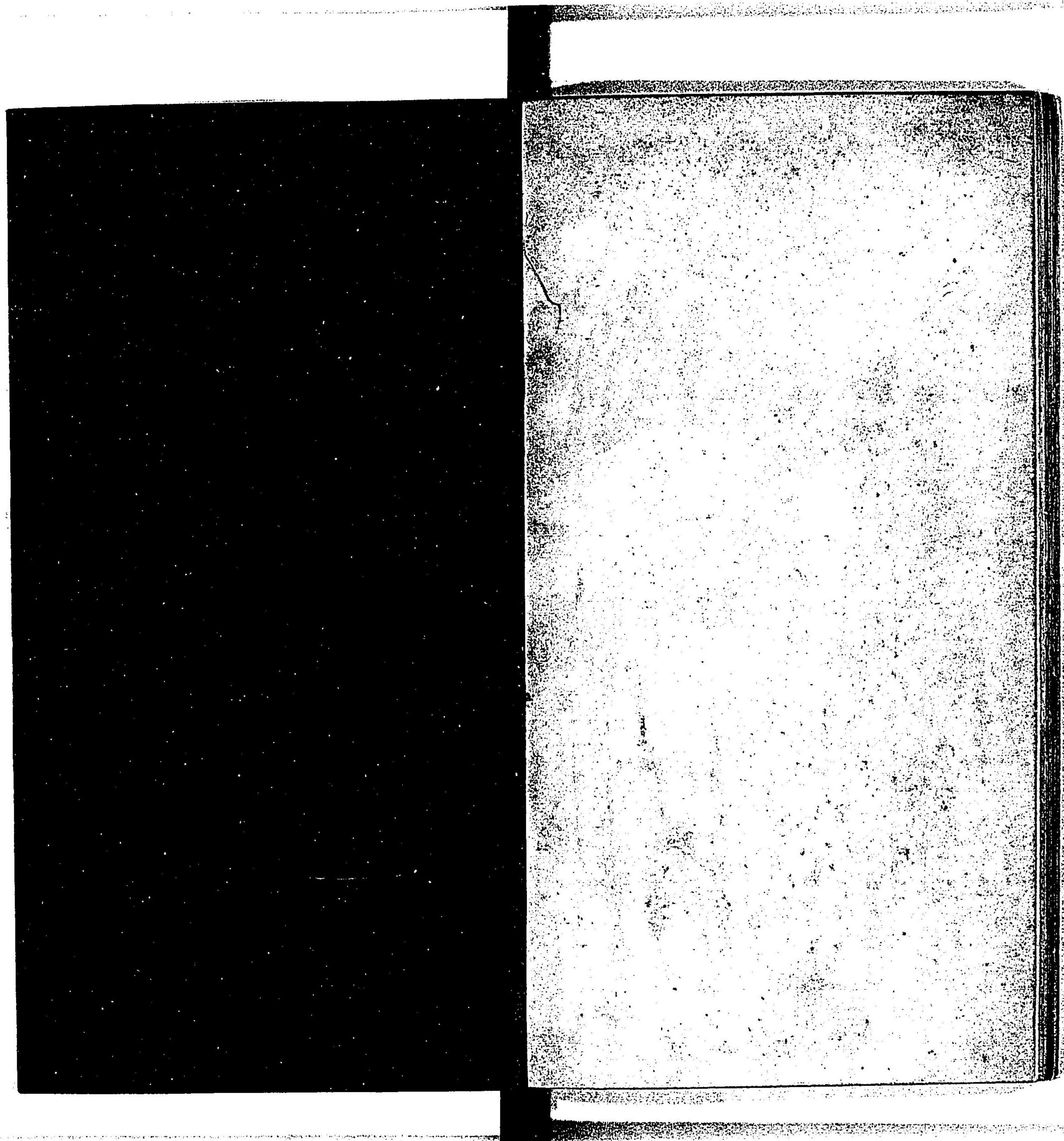
是れ真正の喜劇は、人生の性癖弱點を登
場人物に權化せしめて、クスグリの無理
笑ひを看客に強ひず、涙を通しての無邪
氣の笑ひを看客に贈らざる可らざるが故

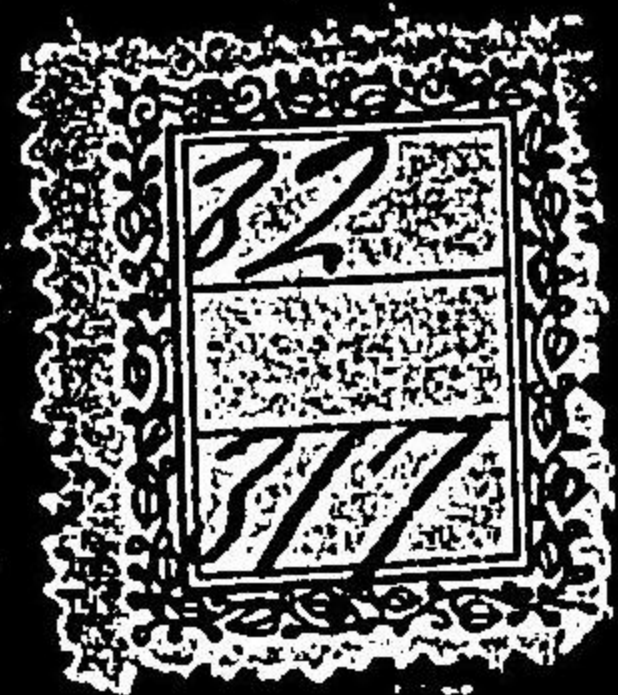
らんも、吾文壇並に劇壇に取つては實に
氏の力を多とせざる可らず。

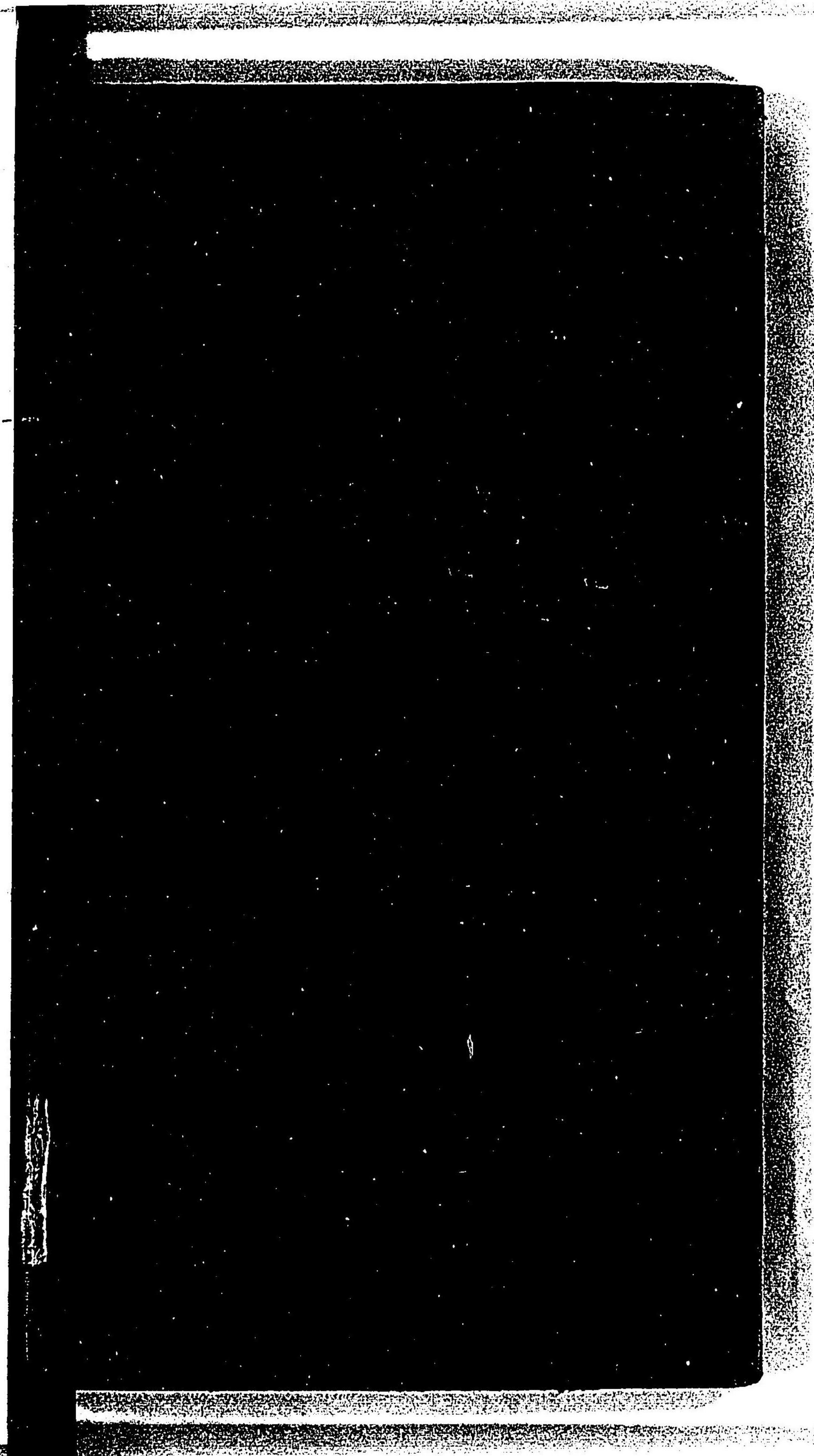
玉手箱は上下二幕三場にして、其梗概は
文學士本野彙雄、花野春助の兩人共に飛
鳥井家の令嬢百合子に戀し、互ひに友人
杉山ドクトルの智恵を借りて妨害運動を
試み、本野はドクトルより喰の藥を得て
吃りの直る秘藥と花野を欺き、花野直接
結婚申込みの場に主客令嬢喰み責めに遭
ふの失敗あり。第二幕花野は本野の復讐
せんとして、ドクトルの智恵を借り、本
野と百合子を互ひに讐なりと欺き紹介し
て百合子本野大聲に話し合の可笑味あり
兩文學士共に此戀に失敗して百合子ドク
トル結婚の發表に終る。是を脚本として
一讀するも哄笑の續發を禁ずる能はざれ

ば、是れを舞臺に演じて看客の大噓喝采
を博するや必せり。

唯餘りに巧みに舞臺面の配合と登場人物
の取合せに注意し過ぎたるの感あると、
戀に對する人性の弱點を兩文學士の孰れ
にも充分に發揮せざりし點を遺憾とする
も是は望蜀の慾のみ、飛鳥井家客間の場
に巖が現時青年の惰弱を叱咤するが如き
は、矢野次郎氏をモデルにせしやの風評
あつて、眞に痛快を極め、氏の傑作ハイ
カラアに次て我邦フワース中の上乗なる
ものといふ可し。余輩は太郎氏の實業界
に盡瘁さるゝの餘暇益々模範的喜劇を創
作し我邦劇壇の喜劇の盛んなる猶泰西の
それの如くならしむるに一臂の力を添ら
れん事を切望して止ざる也（中央新聞批評）









088924-000-8

32-317

桃太郎

平木 照雄

水島 爾 / 著

M40

DBK-0108

